

2列王記4-5章「預言者への養い」

1A 生活の必要 4

1B 亡き預言者の妻 1-7

2B シュネムの女 8-37

1C 子の報い 8-17

2C 女の苦悩 18-28

3C 子の生き返り 29-37

3B 飢饉 38-44

2A 貪りへの戒め 5

1B 異邦人への証し 1-19

1C 単純な従順 1-14

2C 異教の中での信仰 15-19

2B 貪りへの対価 20-27

本文

列王記第二 4 章を開いてください。今日は内容が盛りだくさんなので、4 章と 5 章の二章だけを学びたいと思います。私たちは前回、エリヤが天に上げられて、それからエリヤの霊の二つの分け前を受け取ったエリシャが、預言者としての働きを行ない始めたところを読みました。ヨルダン川をエリヤの外套で二つに分け、そこを渡り、それからエリコでの苦い水を清めました。エリシャに与えられている神の権威に挑みかかった四十二人の若者は雌熊によって掻き裂かれました。

そしてエリシャに与えられた御霊による、奇蹟の賜物がさらに用いられることとなります。4 章以降に出てくる数々の奇蹟は、主に、「預言者たちの生活の必要」に関わるものです。預言者サムエルの時代から現れてきたのが、「預言者のともがら」あるいは「預言者集団」であります。神の預言を受けるための訓練を受ける仲間たちであります。彼らの生活の必要、またエリシャ自身の生活の糧が得られる必要がある訳です。

覚えていますか、エリヤがアハブに三年間、イスラエルに雨が降らない預言を行なった後に神がお見せになった奇蹟は、エリヤ自身が生活の糧を与えられるものでした。烏が肉とパンを運んできて、それからシドンのやもめによって、壺には尽きることのない油と、かめの粉がありました。神の働きをすることにおいて、私たちが絶えず受ける挑戦は生活の糧でありましょう。自分自身が教会にどれだけ関わるのか考える時に、自分に与えられている仕事のことをすぐに考えるでしょう。

皆さんにも何人かの方が、私たちがどのように生活の糧を得ているのか質問してこられた方がいます。確定した保障というのがないのです。そして、宣教師や牧師の一人一人に尋ねると、皆が

確定したものがありません。まさに「鳥のパン」なのです。けれども、フルタイムで奉仕をしている者たちだけでなく、教会に自分の時間を捧げたいと思うならば、あるいは神のために何かを行ないたいと願うならば、生活の糧が最も大きな課題の一つです。主がどのように養われるのか、それを見ていきたいと思えます。

1A 生活の必要 4

1B 亡き預言者の妻 1-7

4:1 預言者のとものがらの妻のひとりがエリシャに叫んで言った。「あなたのしもべである私の夫が死にました。ご存じのように、あなたのしもべは、主を恐れておりました。ところが、貸し主が来て、私のふたりの子どもを自分の奴隷にしようとしております。」

預言者の一人の夫が死に、残された妻と子どもたちが取立て屋に追われている窮状を、エリシャに訴えています。当時は福祉制度がなく、母子家庭に対する生活保護もなく、やもめはひどく貧しい状況に陥りました。そのため、モーセの律法にはやもめに対する福祉を規定しています。そして当時は、借金を払わない代わりに、奴隷になることも習慣としてありました。それでエリシャに訴えています。「あなたのしもべは、主を恐れておりました。」という言葉が悲痛ですね。主の僕とされている者たちに、いい加減にしているのにも関わらず富を集めている悪者がいるのですが、真摯に主に従っている者たちに、このような窮状に陥る人々というのはかなり多くいます。

4:2 エリシャは彼女に言った。「何をしてあげようか。あなたには、家にどんな物があるか、言いなさい。」彼女は答えた。「はしための家には何もありません。ただ、油のつぼ一つしかありません。」

「何をしてあげようか」という言葉を発していますが、次のシュネムの女に対しても同じ言葉を話します。エリシャは、必要を満たしたいという思いでいっぱいです。そして大切なのは、「あなたには、家にどんな物があるか、言いなさい。」というものです。必要を満たすために、今あるものが何かを尋ねています。今、自分に既にあるものを神に差し出すということが、次に神が必要を満たすために必要なことです。女は、「油のつぼ一つしかありません」と答えています。興味深いことです、エリヤがシドンのやもめの所に行った時も、同じように油の壺一つ、またパンのかめ一つしかありませんでした。けれども、エリシャの必要の満たしは、エリヤの時よりももっと大胆です。

4:3 すると、彼は言った。「外に出て行って、隣の人みなから、器を借りて来なさい。からの器を。それも、一つ二つではいけません。4:4 家にはいったなら、あなたと子どもたちのうしろの戸を閉じなさい。そのすべての器に油をつぎなさい。いっぱいになったものはわきに置きなさい。」4:5 そこで、彼女は彼のもとから去り、子どもたちといっしょにうしろの戸を閉じ、子どもたちが次々に彼女のところに持って来る器に油をついだ。4:6 器がいっぱいになったので、彼女は子どもに言った。「もっと器を持って来なさい。」子どもが彼女に、「もう器はありません。」と言うと、油は止まった。4:7 彼女が神の人に知らせに行くと、彼は言った。「行って、その油を売り、あなたの負債を払い

なさい。その残りで、あなたと子どもたちは暮らしていけます。」

エリシャは、状況をしっかりと把握していました。単に彼女と子供たちの日用の糧が満たされるだけでは不十分です。取り立て屋が来ているのですから、借金を返済しなければいけません。それで、「ありったけの空の器を持って来なさい」と指示したのです。そして「後ろの戸を閉じなさい」と言ったのは、この恵みを受ける当事者である女とその子供だけが目撃することのできるようにするためです。これはちょうど、イエス様がヤイロの娘を生き返らせる時に、弟子三人の他、娘の両親だけを同席させたのと同じです。

ここで大事なのは、子供が「もう器はありません」と言った時に「油は止まった」というところです。彼女の信仰が、空の器を持ってくることによって量られました。どこまで持って来られるかによって、油の量が変わりました。どこまで両手を広げて、神の恵みを受けることができるかが試されていました。詩篇には、こういう言葉があります。「わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。(81:10)」どこまで大きな口を開けることができるかによって、神が満たされる恵みが決まるのです。私たち主に対する働きも、どこまで自分が口を開く、両手を広げているかによって、神の恵みの広がりも変わってきます。

2B シュネムの女 8-37

1C 子の報い 8-17

4:8 ある日、エリシャがシュネムを通りかかると、そこにひとりの裕福な女がいて、彼を食事に引き止めた。それから、そこを通りかかるたびごとに、そこに寄って、食事をするようになった。4:9 女は夫に言った。「いつも私たちのところに立ち寄って行かれるあの方は、きっと神の聖なる方に違いありません。4:10 ですから、屋上に壁のある小さな部屋を作り、あの方のために寝台と机といすと燭台とを置きましょう。あの方が私たちのところにおいでになるたびに、そこをお使いになれますから。」

シュネムという町がイスラエル平原の東にあります。イスラエル平原の東には、北からタボル山、モレ山、そしてギルボア山があります。ギデオンとミデヤン人が戦った時に、モレ山を境にして南にギデオン軍が、北にミデヤン人が宿営していました。そのモレ山を挟んで二つの町があります。北には、新約聖書に登場するナインの町です。イエス様がそこで、やもめの息子が死んで、棺桶にかけてその子を生き返らせました。それがナインの町ですが、モレ山を挟んで南にシュネムの町があります。

先ほどの預言者のやもめとは対照的に、彼女は裕福な女でした。そして、エリシャは預言者のやもめにはその必要を満たしましたが、エリシャ自身もその生活がありました。その生活を彼女は一手に引き受けたのです。これはいくら裕福と言えども、大きな費用がかかったことでしょう。預言者

ですから、神から語られたものを書き留める書齋が必要でした。それで寝台の他に机と椅子と燭台を用意しています。

その彼女も初めは、食事を出すだけでした。けれども、彼女は、エリシャが神の聖なる方に違いないとのことで、彼のための小さな部屋を作ったのです。彼女は、神を敬い、神の預言者だということでその必要を養ったのです。イエス様の言葉をここで思い出しますが、「わたしの弟子だということで、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。(マタイ 10:42)」確かにシュネムの女は、その報いから漏れることはありませんでした。

4:11 ある日、エリシャはそこに来て、その屋上の部屋にはいり、そこで横になった。4:12 彼は若い者ゲハジに言った。「このシュネムの女を呼びなさい。」彼が呼ぶと、彼女は彼の前に立った。4:13 エリシャはゲハジに言った。「彼女にこう伝えなさい。『ほんとうに、あなたはこのように、私たちのことでいっしょうけんめいほねおってくれたが、あなたのために何をしたらよいか。王か、それとも、将軍に、何か話してほしいことでもあるか。』」彼女は答えた。「私は私の民の中で、しあわせに暮らしております。」4:14 エリシャは言った。「では、彼女のために何をしたら良いだろうか。」ゲハジは言った。「彼女には子どもがなく、それに、彼女の夫も年をとっています。」

これは、どのようにして報いを与えればよいかエリシャも困ったことでしょう。なんせ裕福な女ですから。富んだ人の必要を満たすのは難しいことです。それでエリシャは、「王か、それとも、将軍に、何か話してほしいことでもあるか。」と尋ねています。何か法的なこと、国の指導者が関わらなければいけない課題を持っていたのでしょうか。3章でのモアブとの戦いで見ましたように、エリシャは既にイスラエルの王ヨラムによって、主の預言者の一人とみなされていました。けれども、答えは「私は私の民の中で、しあわせに暮らしております。」という、素っ気無いものです。

確かに生活に満足していたのでしょうか。差し当たって大きな問題もないようです。でも、彼女には本当に必要がなかったのでしょうか？そうです、あまりにも大きな必要があったのです。子がいませんでした。聖書には、この必要を持っていた女が数多く出てきましたね。アブラハムの妻サラから始まり、飛んでサムエルの母ハンナがいました。新約聖書では、バプテスマのヨハネの両親も、年老いていたのに子供に恵まれませんでした。当時は、子がいない女は呪われているとさえ思われていました。富を持ってしても埋めることのできない辛さがありました。

けれども彼女は、平静を装っていました。幸せに暮らしている、と答えていました。神の預言者であると認めているのに、そのことを打ち明けませんでした。イエス様が、ヤコブの井戸でお会いになったサマリヤの女のことを思い出してください。何事もないように水を汲みに来ていましたが、イエス様は、「あなたには五人の男がいて、今の男は結婚をしてもいない。」ということを行い、それで彼女は初めて心を開きました。私たちは仮面を被って外を歩いています。「私は大丈夫で

す」という仮面を被っています。しかし、主あって外さなければいけません。

4:15 エリシャが、「彼女を呼んで来なさい。」と言ったので、ゲハジが彼女を呼ぶと、彼女は入口のところに立った。4:16 エリシャは言った。「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになろう。」彼女は言った。「いいえ。あなたさま。神の人よ。このはしのために偽りを言わないでください。」4:17 しかし、この女はみごもり、エリシャが彼女に告げたとおり、翌年のちょうどそのころ、男の子を産んだ。

エリシャには、ゲハジという僕がいました。エリシャの付き人でした。エリヤにも実は、そのような付き人がいました。彼がカルメル山で雨のために祈っていた時に、若者に空を見て来なさいと言いつけています。そして、かつて御使いがアブラハムに宣言したように、「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになろう。」と言います。

彼女は強く反発します。彼女に子がいないのはあまりにも痛ましく、心の傷となっており、変な期待をかけさせて裏切るようなことはしないでくれ、という叫びであろうと思います。しかし、ここから彼女の信仰が試されています。主の慰めは、決して人を裏切らないのです。主にあって十全なのです。神は彼女に子を授けられました。

2C 女の苦悩 18-28

4:18 その子が、大きくなって、ある日、刈り入れ人といっしょにいる父のところに出て行ったとき、4:19 父親に、「私の頭が、頭が。」と言ったので、父親は若者に、「この子を母親のところに抱いて行ってくれ。」と命じた。4:20 若者はその子を抱いて、母親のところに連れて行った。この子は昼まで母親のひざの上に休んでいたが、ついに死んだ。

かつてエリヤが世話になったシドンのやもめと同じ事が起こりました。男の子の死です。畑仕事をして倒れてしまったのは、熱中症だったのでしょうか。

4:21 彼女は屋上に上がって行って、神の人の寝台にその子を寝かし、戸をしめて出て来た。4:22 彼女は夫に呼びかけて言った。「どうぞ、若者のひとりと、雌ろば一頭を私によこしてください。私は急いで、神の人のところに行って、すぐ戻って来ますから。」4:23 すると彼は、「どうして、きょう、あの人のところに行くのか。新月祭でもなく、安息日でもないのに。」と言ったが、彼女は、「それでも、かまいません。」と答えた。

男の子が、死んでしまいました。彼女の取った行動は、「残る期待はただ、神の人エリシャしかない。」ということでありました。彼をエリシャの寝台に置きます。そして戸を閉めました。誰にも知られないためです。夫にも知らせません。夫が男の子について、自分がエリシャのところに行くことを賛成してくれないかもしれないと思ったのでしょうか。興味深いことに、新月祭や安息日を北イスラ

エルでも守っていた人がいました。やはりかつて主がエリヤに言われたように、残された民が七千人いたというのは、その通りでした。

思い出す証しは、チャック・スミスの誕生の背景です。非常に幼かったお姉さんが、脊髄髄膜炎により痙攣を起こし、息も止まりました。もう絶体絶命でした。お母さんは近くの教会に彼女を連れていき、牧師さんに祈ってもらったのです。牧師さんは、「今、この子から目を離して、主を見上げましょう。」と言って、二人で主に祈りました。彼女は祈りました。「主よ、この子を取り戻してください。もしそうして下さるなら、今、お腹の中にいる子をあなたにお捧げします。」お父さんが戻ってきました。彼も、生気のなくなった娘を見て、神に泣き叫びました。すると息を吹き返したのです！そして彼女を病院に連れて行ったら、もう正常に体が機能していました。それ以来、チャックのお父さんは単に教会に通う人ではなく、日々をイエス様と共に歩むクリスチャンに変えられたそうです。おそらく、シュネムの女の夫は、変えられる前のチャックのお父さんに似たような状況にいたのかもしれない。

4:24 彼女は雌ろばに鞍を置き、若者に命じた。「手綱を引いて、進んで行きなさい。私が命じなければ、手綱をゆるめてはいけません。」4:25 こうして、彼女は出かけ、カルメル山の神の人のところへ行った。神の人は、遠くから彼女を見つけると、若い者ゲハジに言った。「ご覧。あのシュネムの女があそこに来ている。」

エリシャは、北イスラエルの各地を巡回していましたが、カルメル山は立ち止まる主要な所の一つになっていたようです。

4:26 さあ、走って行き、彼女を迎え、『あなたは無事ですか。あなたのご主人は無事ですか。お子さんは無事ですか。』と言いなさい。」それで彼女は答えた。「無事です。」4:27 それから、彼女は山の上の神の人のところに来て、彼の足にすがりついた。ゲハジが彼女を追い払おうと近寄ると、神の人は言った。「そのままにしておきなさい。彼女の心に悩みがあるのだから。主はそれを私に隠され、まだ、私に知らせておられないのだ。」

シュネムの女は、ゲハジに対して嘘をつきました。けれども理解できない訳でもありません。今、自分の子が死んでいる時に一秒たりとも時間を無駄にしたくありません。そしてゲハジを信用していなかったのでしょう。彼は、どうも霊的な人のようには見えません。次の章のナアマンの話でそれが露呈します。

そして驚くことは、エリシャの驚きです。彼は、この女が今、何について泣いているのか、何の心の悩みなのか、主が知らせてくださらないことを驚いているのです。つまり、言い換えれば、主は通常はエリシャに、人が何かを行なっている時の心の動きを示していただけた、ということです。コリント第一 12 章では、御霊の賜物の中に「知識の言葉」というものがあります。主が、ある人の

状態を超自然的にお見せになるその知識が、御霊の賜物として与えられます。

4:28 彼女は言った。「私があなたさまに子どもを求めたでしょうか。この私にそんな気休めを言わないでくださいと申し上げたではありませんか。」

ここに彼女の強い思いが現れています。彼女は自分に子がなかったという傷から回復していませんでした。男の子が生まれましたが、いつかなくなってしまうのではないかという恐れを抱いていました。期待をしないことによって、自分の心がそれ以上傷つかないようにその思いを内に抑え込んでいたのです。

3C 子の生き返り 29-37

4:29 そこで、彼はゲハジに言った。「腰に帯を引き締め、手に私の杖を持って行きなさい。たといだれに会っても、あいさつしてはならない。また、たといだれがあいさつしても、答えてはならない。そして、私の杖をあの子の顔の上に置きなさい。」4:30 その子の母親は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたを離しません。」そこで、彼は立ち上がり、彼女のあとについて行った。

エリシャはまず、ゲハジに初めに行かせました。「腰に帯を引き締め」というのは、走ることができるように衣をまくり上げることです。そして、かつてのモーセの杖のように、杖によって神の力が現されることを信仰の期待によって、ゲハジに託しました。そして、「あいさつしてもはならない」というのは、緊急を要するからです。そして女は決してエリシャを離さない、と言っています。それは、ゲハジによっては癒されることはできない、エリシャしか信頼していません、ということです。ちょうど、エリシャ本人がかつて、エリヤに対して、「私はあなたを離れない。」と言ったのと同じです。

4:31 ゲハジは、ふたりより先に行って、その杖を子どもの顔の上に置いたが、何の声もなく、何の応答もなかったので、引き返して、エリシャに会い、「子どもは目をさましませんでした。」と言って彼に報告した。4:32 エリシャが家に着くと、なんと、その子は死んで、寝台の上に横たわっていた。

シュネムの女は、エリシャにはっきりと伝えていなかったのでしょうか。そしてエリシャも、主から示されていなかったもので、ここでようやく、この子が死んでしまっていることを知りました。

4:33 エリシャは中にはいり、戸をしめて、ふたりだけになって、主に祈った。4:34 それから、寝台の上に上がり、その子の上に身を伏せ、自分の口を子どもの口の上に、自分の目を子どもの目の上に、自分の両手を子どもの両手の上に重ねて、子どもの上に身をかがめると、子どものからだから暖かくなってきた。4:35 それから彼は降りて、部屋の中をあちら、こちらと歩き回り、また、寝台の上に上がり、子どもの上に身をかがめると、子どもは七回くしゃみをして目を開いた。

これは、何か魔法をかけているのではありません。エリシャが、必死に祈っていて、その中で起こした行動でした。戸を閉めているのは、集中して祈るためです。信仰によって、まるで人工呼吸をするかのように口と口を合わせて、体も合わせたら、体温が戻ってきました。さらに彼は必死に祈りました。部屋を歩き回っています。そして、ついに七回もくしゃみをしました。七回ですから、これが神の数字、神の御業であることを表しています。

4:36 彼はゲハジを呼んで、「あのシュネムの女を呼んで来なさい。」と言いつけた。ゲハジが彼女を呼んだので、彼女はエリシャのところに来た。そこで、エリシャは、「あなたの子どもを抱き上げなさい。」と言った。4:37 彼女ははいって来て、彼の足もとにひれ伏し、地に伏しておじぎをした。そして、子どもを抱き上げて出て行った。

女に男の子は戻ってきました。そして、女はひれ伏してそのお礼を表現しています。そして、エリシャはイエス様の型です。先ほど話したように、このシュネムはモレ山の南にあります。北のナインという町において、やもめの息子を生き返らせました。

私たちは、この女の話から何を学ぶことができるでしょうか？「活きている信仰」でしょう。彼女の信仰は、「幸せに暮らしております」というところから、子を一時失うことによって活きたものとなりました。私はいま原稿に、「生命」の「生」を使わず、「活力」の「活」の字を書いて、「活きている信仰」と書きました。何としてでも、この神の人を通して自分の子を生かしてもらいたい、その強い思いが具体的な信仰となって表れています。神の人の部屋にその子を寝かせた姿。すぐに雌ろばに乗った姿。エリシャの足のあたりにくっついて離れない姿。そして、ゲハジを送ったけれども、その杖は信用せず、絶対にエリシャをどこかに去らせない姿。そしてエリシャも、手を使い、足を使い、口も使って、必死になって祈る姿。これらが、みな躍動しています。活きています。イエス様が地上におられた時も、癒しを受ける人々は必死であり、具体的な行動に移っていました。受動的な信仰ではなく、極めて能動的な信仰でした。

3B 飢饉 38-44

4:38 エリシャがギルガルに帰って来たとき、この地にききんがあった。預言者のともがらが彼の前にすわっていたので、彼は若い者に命じた。「大きなかまを火にかけ、預言者のともがらのために、煮物を作りなさい。」

話は、預言者のともがらのところに戻ります。エリヤはギルガルに帰ってきました。覚えていますが、エリヤがここからベテルに行くと言ったところ。預言者のともがらがそこにいました。そして、ここで大事なことは「飢饉」があったことです。これはもしかしたら、8章1節に書かれている七年間の飢饉のことでしょう。その飢饉によって起こった事件が二つ書かれています。初めは、煮物の中の毒です。

4:39 彼らのひとりが食用の草を摘みに野に出て行くと、野生のつる草を見つけたので、そのつるから野生のうりを前掛けにいっぱい取って、帰って来た。そして、彼は煮物のかまの中にそれを切り込んだ。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。4:40 彼らはみなに食べさせようとして、これをよそった。みながその煮物を口にするや、叫んで言った。「神の人よ。かまの中に毒がはいっています。」彼らは食べることができなかった。

「毒」の直訳は、「死」です。死ぬほどの毒性を持っていた、ということです。

4:41 エリシャは言った。「では、麦粉を持って来なさい。」彼はそれをかまに投げ入れて言った。「これをよそって、この人たちに食べさせなさい。」その時にはもう、かまの中には悪い物はなくなっていた。

以前は、塩を苦い水に入れたことによって、水が清められました。ここでは小麦を入れることによって、かまにあるうりの毒素が消えました。穀物の捧げ物を思い出します。

主は必要を備え、備えるだけでなく、災いから守ってくださる方です。主は飢饉を許されたように、私たちにも試練を許されるかもしれません。そして経済的にも乏しいことが出てくるかもしれません。その時に何とかしてやりくりしなければいけません。けれども、そこに神は真実を表してくださいませ。少しひもじくなるかもしれないけれども、それでも事欠くことはありません。さらに、このような予期せぬ事故や事件も起こります。けれども主はそれでも守ってくださるのです。

4:42 ある人がバアル・シャリシャから来て、神の人に初穂のパンである大麦のパン二十個と、一袋の新穀とを持って来た。神の人は、「この人たちに与えて食べさせなさい。」と命じた。4:43 彼の召使は、「これだけで、どうして百人もの人に分けられましょう。」と言った。しかし、エリシャは言った。「この人たちに与えて食べさせなさい。主はこう仰せられる。『彼らは食べて残すだろう。』」4:44 そこで、召使が彼らに配ると、彼らは食べた。主のことばのとおり、それはあり余った。

続けて、ギルガルの預言者のともがらが、飢饉の中で食料が不足している状態の話です。ある人がやって来ました。そして初穂のパンを持って来ました。初穂は、主への祭りの時に捧げるものでありますが、この飢饉の時にそれをエリシャと預言者のともがらに捧げることによって、彼らを助けると同時に、主に捧げたかったのでしょう。

けれども、ともがらの人数は百人です。持ってきたものでは全然足りません。けれども、十分に分け与えることができるだけでなく、食べて残すくらい与えられるという神からの約束です。これはもちろん、イエス様の五千人の給食につながる奇蹟です。その男たちも満腹になり、さらに余っていました。ここに、主は、私たちを満たすだけでなく、溢れさせてくださると言うことを知ります。

2A 貪りへの戒め 5

そして次の 5 章は、必要が満たされることではなく、欲望が満たされる誘惑の話です。主が豊かに恵んでくださることと、自分の欲が満たされることとは全く違います。その違いは何でしょうか？豊かにされた時に、自分がその財産をもってさらに主にお仕えする恵みに消化されていけば、それは神から来たものです。主に属しているのだから、主にお返ししようと思うわけです。それとも、自分自身のために使う、主への情熱が冷えてしまうような形で使われていたのなら、それは自分の欲望が満たされたということです。自分の心は主の御霊に無感覚になり、信仰生活、教会生活は送っているのですが、形だけのものになっていきます。

5 章には、すばらしい証しが初めにあります。異邦人、しかもイスラエルの敵であるアラムの将軍であるナアマンの癒しです。けれども、彼の与えようとする贈り物があります。それは、彼なりの感謝の表れですが、世的なものでありました。彼は異邦人なので、神ご自身を礼拝するということが、まだ良く分かりません。それで、人に対する贈り物になっていました。エリシャはそれを一切受け入れなかったのがエリシャですが、しもべゲハジは受け取ってしまったのです。

1B 異邦人への証し 1-19

1C 単純な従順 1-14

5:1 アラムの王の将軍ナアマンは、その主君に重んじられ、尊敬されていた。主がかつて彼によってアラムに勝利を得させられたからである。この人は勇士ではあったが、らい病にかかっていた。

ナアマンはアラム(今のシリア)の王の将軍です。アハブの時代からアラムとイスラエルは敵対していました。けれども、アハブの時にベン・ハダデと契約を結びました。北からの脅威、アッシリヤという共通の敵がいたからです。当時のアッシリヤは、まだ大した力を持っていませんでした。ですから、契約を結んだ三年後、聖書には書かれていませんが、アッシリヤを撃退した記録が文書に残っています。ですからアラムとイスラエルは互いに敵対しているのですが、それでも交渉の窓口は開いており、事あれば非公式で協力することもありました。後に、アッシリヤが強くなった時に公に軍事同盟を結びアッシリヤに抵抗しましたが、ダマスコが倒れ、そしてイスラエルも倒れるという共倒れになりました。

このような敵国のアラムですが、主が彼に関わってください。「主がかつて彼によってアラムに勝利を得させられたからである」とあります。これらがどの戦いであるか分かりませんが、もしかしたら、アハブがラモテ・ギルアデを奪還すべく戦った時も含まれているかもしれません。アラム軍の指揮を取っていたのは、ナアマンだったのかもしれませんが。このように、イスラエルに対して戦っている時でさえ、神の主権から外れることはありませんでした。

そしてこのナアマンの出来事を、イエス様はナザレの会堂にて引き出されたのです。預言者は自

分の郷里では歓迎されないと言われ、そしてエリヤが、イスラエルのやもめではなく、シドンのやもめに遣わされたと言われました。その次にこう言われています。「また、預言者エリシャのときに、イスラエルには、らい病人がたくさんいたが、そのうちのだれもきよめられないで、シリア人ナアマンだけがきよめられました。(ルカ 4:27)」主が、イスラエルを越えて異邦人に対して恵みを与えている、ということです。これは一つの原則です。神が語ろうとされているのに、それに対して神の民がかたくなにすれば、神は外にいる人々にその恵みを押し流そうとされるということです。

そしてナアマンは、「その主君に重んじられ、尊敬されていた」けれども、それでも「らい病」という負い目を持っていました。裕福なシュネムの女と同じですね。どんなに高い地位にいても、どんなに有能な人でも、何も不足がないように見えても、多くの人が負い目を持っています。

5:2 アラムはかつて略奪に出たとき、イスラエルの地から、ひとりの若い娘を捕えて来ていた。彼女はナアマンの妻に仕えていたが、5:3 その女主人に言った。「もし、ご主人さまがサマリヤにいる預言者のところに行かれたら、きっと、あの方がご主人さまのらい病を直してくださるでしょうに。」5:4 それで、ナアマンはその主君のところに行き、イスラエルの地から来た娘がこれこれのことを言いました、と告げた。

主が不思議な方法でナアマンに近づいてくださっています。ナアマンが略奪をしている時に連れて来たイスラエル人の若い娘、そして自分の妻の奴隷にした娘が、神の預言者エリシャを敬っていた人でありました。私はこのような、小さな人が主によって大いに用いられるという自信を、みなさんに持っていただけたらと思います。状況としては、あまりにも理不尽である。ここは、主が関与されているところとは違う。いや違います。主が、何かを行なおうとお決めになっていたなら、自分が卑しさと思っている所さえ、神は大きな業を行なわれるために用いられるのです。

5:5 アラムの王は言った。「行って来なさい。私がイスラエルの王にあてて手紙を送ろう。」そこで、ナアマンは銀十タラントと、金六千シケルと、晴れ着十着とを持って出かけた。

ナアマンの真面目さぶりが伺えます。王直々の手紙で行くのだから、シリアを代表して行くのだからということで、非常に高価な贈り物を用意しました。私たちのレベルに直したら、難病も癒されたという証しを持っている伝道者のところに、同じ難病を持った人が先端技術の医療を受けるかのような気持ちで、高額の謝礼金を用意しているような感じでしょう。

5:6 彼はイスラエルの王あての次のような手紙を持って行った。「さて、この手紙があなたに届きましたら、実は家臣ナアマンをあなたのところに送りましたので、彼のらい病から彼をいやしてくださいますように。」5:7 イスラエルの王はこの手紙を読むと、自分の服を引き裂いて言った。「私は殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。この人はこの男を送って、らい病を直せと言う。しかし、考えてみなさい。彼は私に言いがかりをつけようとしているのだ。」

イスラエルの王ヨラムは憤慨しました。アラムの王ベン・ハダデ二世は真面目でしたが、ヨラムはこんな馬鹿げた話はなく、將軍によってイスラエルに揺さぶりをかけているだけに違いはないと思いました。

5:8 神の人エリシャは、イスラエルの王が服を引き裂いたことを聞くと、王のもとに人をやって言った。「あなたはどうして服を引き裂いたりなさるのですか。彼を私のところによこしてください。そうすれば、彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」

エリシャに、神からの機会が与えられました。イスラエル人にだけでなく、異邦人にも、生きる神、主なる方がおられることを証しすることができるのです。

5:9 こうして、ナアマンは馬と戦車をもって来て、エリシャの家の入口に立った。5:10 エリシャは、彼に使いをやって、言った。「ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだは元どおりになってきよくなります。」5:11 しかしナアマンは怒って去り、そして言った。「何ということだ。私は彼がきつと出て来て、立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このらい病を直してくれると思っていたのに。5:12 ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているではないか。これらの川で洗って、私がきよくなれないのだろうか。」こうして、彼は怒って帰途についた。

ナアマンのいうダマスコの川は、どのような川なのかな？と思ひまして調べましたら、結構きれいな川です。今は、「バラダ川」と呼ばれています。それに故郷のものは誰でも誇りを持っていますから、何でも美しく、また優って見えることでしょう。

エリシャは、裕福の女に対しては非常に個人的に接しましたが、ナアマンに対して冷淡にさえ思えるような形で接しています。けれども、これは彼をまことの神に導くためであります。彼が主に近づくのには妨げになっているのではないかとと思われるのが、この高い自尊心でありました。これが限り、たとえ癒されても主なる神をあがめることはしないでしょう。それで、彼を試したのです。このように一人一人が、主に出会うことのできる道は異なります。私たちも試される時があると思います。けれども、それを乗り越えてこそ、ナアマンのように真に主に出会う最短の道を歩くことができます。

5:13 そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。「わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいことをあなたに命じたとしたら、あなたはきつとそれをなされたのではありませんか。ただ、彼はあなたに『身を洗って、きよくなりなさい。』と言っただけではありませんか。」5:14 そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった。

ナアマンにとってのへりくだりの一歩は、自分のしもべの助言でした。この言葉を聞くか聞かないかの選択がありました。彼は聞きました。この何気ない一歩が大切です。午前も学びましたが、ペテロは、「とりあえず、お言葉通りに網を降ろしてみましよう。」と言ったので、それで大漁を経験し、主に一生涯従う弟子となったのです。

2C 異教の中での信仰 15-19

5:15 そこで、彼はその一行の者を全部連れて神の人のところに引き返し、彼の前に来て、立って言った。「私は今、イスラエルのほか、世界のどこにも神はおられないことを知りました。それで、どうか今、あなたのしもべからの贈り物を受け取ってください。」5:16 神の人は言った。「私が仕えている主は生きておられる。私は決して受け取りません。」それでも、ナアマンは、受け取らせようとしきりに彼に勧めたが、彼は断わった。

すばらしいです、ナアマン自身の口から、「イスラエルのほか、世界のどこにも神はおられない」という言葉が出ました。そして後に使徒ペテロは、さらにイスラエルの子孫であられる、イエスの名によってしか、救われることはできないと断言しました。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。(使徒 4:12)」

そして、この癒しはあくまでも主ご自身が行なわれたものです。ですから、主に対して自分自身の魂を贈り物として捧げれば良いわけですが、彼は神々をあがめる異教徒でした。異邦人のローマ百人隊長コルネリオが、自分の家にペテロが着くと、彼の足元にひれ伏して拝もうとしました(使徒 10:25)が、天を住まいとされない神をあがめていない人々にとって、被造物をほめたたえてしまう習慣が残っています。それで、エリシャは贈り物を受け取るのを一切拒みしました。

贈り物を受け取らないことも、当時の習慣としてはずいぶん失礼なことです。けれども、ナアマンは正しい反応をしました。自分がアラムに戻った時に、主をあがめる準備をしたいと願いました。

5:17 そこでナアマンは言った。「だめでしたら、どうか二頭の驛馬に載せるだけの土をしもべに与えてください。しもべはこれからはもう、ほかの神々に全焼のいけにえや、その他のいけにえをささげず、ただ主にのみささげますから。

ナアマンは、アラムの地においても何とかしてイスラエルの神をあがめたいと願って、それでイスラエルの土を盛って、そこでヤハウエのみにいけにえを捧げることを誓いました。厳密に言えば、そんなことをしなくても良かったのです。アラムにある土を使っても、ヤハウエに対していけにえを捧げて良かったでしょう。けれども、彼の精一杯の主への献身でした。

5:18 主が次のことをしもべにお許しくださいますように。私の主君がリモンの神殿にはいて、そ

ここで拝む場合、私の腕に寄りかかります。それで私もリモンの神殿で身をかがめます。私がリモンの神殿で身をかがめるとき、どうか、主がこのことをしもべにお許しくださいますように。」5:19 エリシャは彼に言った。「安心して行きなさい。」そこでナアマンは彼から離れて、かなりの道のりを進んで行った。

ナアマンは何と誠実な人でしょうか！彼は、イスラエルの神に立ち返ってから、異教の神々をたとえ儀式の中でもあがめる姿勢を取らないようにする方法を一生懸命探していました。イスラエルの多くの者たちが、そして王ヨラムを含めて、平気でヤハウエをあがめ、同時に金の子牛またバアルを拝んでいた時に、異邦人である彼のほうが事の本質を分かっていたのです。けれども、彼には公的義務がありました。王の側近として、アラムの神に対する儀礼に一部、加わらなければいけませんでした。その時にもイスラエルの神、ヤハウエに対する背信となりたくないという思いをここで言い表しています。

そして、エリシャは「安心して行きなさい。」と言いました。ここの箇所は、数多くの人が、公人が異教の宗教儀式に参加しても良いとするのに使われる箇所となっています。これは、異教の慣わしに従ってはならないとする、他の膨大な聖書箇所を無視する行為であり、ここは新しく信じたばかりのナアマンが明かした悩みのところでもあります。しかも、彼はそれをなるべくくしないように細心の注意を払おうと努力しました。同じく公人であったダニエルの三人はれっきとした信者です。彼らは公的な儀礼であった、金の像を拝むという行為を公然と拒否して、燃える火の炉の中に投げ込まれました。

ここでエリシャが「安心して行きなさい。」と言われたのは、リモンの神殿で身をかがめてもよい、と言っているのではないことに気をつけてください。これは、神殿で身をかがめなくてもよい状況になるから、安心して行きなさいという意味かもしれないのです。列王記第二8章で、ベン・ハダデ王が家臣ハザエルによって殺されます。その直前に、エリシャがハザエルをじっくりと見て、彼が王を暗殺することを予見して、預言しました。エリシャは、このことを知っていたので、王がいなくなっただけからはこの儀礼を行なわなくてよくなる、ということを見越していたのかもしれませんが。

2B 貪りへの対価 20-27

5:20 そのとき、神の人エリシャに仕える若い者ゲハジはこう考えた。「なんとしたことか。私の主人は、あのアラム人ナアマンが持って来た物を受け取ろうとはしなかった。主は生きておられる。私は彼のあとを追いかけて行き、必ず何かをもらって来よう。」

あらまあ・・・であります。自分の貪りを、「主は生きておられる。」という言葉を使って正当化しています。けれども恐いですね、肉の欲を主の名、また霊的な用語を使って正当化することは、事実起こることです。

5:21 ゲハジはナアマンのあとを追って行った。ナアマンは、うしろから駆けて来る者を見つけると、戦車から下りて、彼を迎え、「何か変わったことでも。」と尋ねた。5:22 そこで、ゲハジは言った。「変わったことはありませんが、私の主人は私にこう言ってよこしました。『たった今、エフライムの山地から、預言者のともがらのふたりの若い者が私のところにやって来ましたから、どうぞ、彼らに銀一タラントと、晴れ着二着をやってください。』」5:23 するとナアマンは、「どうぞ。思い切って二タラントを取ってください。」と言って、しきりに勧め、二つの袋に入れた銀二タラントと、晴れ着二着を、自分のふたりの若い者に渡した。それで彼らはそれを背負ってゲハジの先に立って進んだ。

上手ですね、預言者のともがらは基本的に貧しい生活をしていますから、その貧しい神学生(?)に奨学金を宛がってくれませんか?というようなお願いをしているわけです。そしてナアマンは、ゲハジの求める価値以上の贈り物を渡しました。

5:24 ゲハジは丘に着くと、それを彼らから受け取って家の中にしまい込み、ふたりの者を帰らせたので、彼らは去って行った。5:25 彼が家にはいって主人の前に立つと、エリシャは彼に言った。「ゲハジ。あなたはどこへ行って来たのか。」彼は答えた。「しもべはどこへも行きませんでした。」5:26 エリシャは彼に言った。「あの人があなたを迎えに戦車から降りて来たとき、私の心もあなたといっしょに行っていたではないか。今は銀を受け、着物を受け、オリーブ畑やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受ける時だろうか。

エリシャは、ゲハジの心で何があったかを見抜いていました。「今は銀を受け、着物を受け、オリーブ畑やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受ける時だろうか」と言っていますが、ゲハジはまさにこれを心に思い浮べていたのです。

エリシャは御霊に満たされた人でした。御霊の賜物を受け取っていました。奇蹟を行なう力はその一つですね。そしてコリント第一 12 章には、さまざまな御霊の賜物が書かれていますが、その中に知識の言葉があります。これは超自然的に、主がある人の状況について知らせるものであります。

説教の時に、主は知識の言葉を与えてくださいます。説教者がしばしば受ける批判は、「あなたは、私のことをよく調べて、それで私のことを語っていたのでしょうか。」と言われることです。けれども、その時に初めて、「ああ、そうだったのですか！」と驚いているのは説教者本人なのです。自分自身は一般的な事例として、どこかで起こったことを取り上げたり、あるいは自分で作り上げて話しています。けれども、主は御霊によって、それを知識の言葉としておられたのです。

5:27 ナアマンのらい病は、いつまでもあなたとあなたの子孫とにまといつく。」彼は、エリシャの前から、らい病にかかって雪のように白くなって、出て来た。

これが、主の働き人が貪ることによる報いであります。主がそのらい病を清められました。その御業に対して主に栄光を帰することがなく、自分に帰するのであれば、その病が自分の身に降りかかるということです。これが、主に奉仕をする者たちがいつも気をつけなければいけないことです。名声であっても、金銭であっても、決して主によって任されたものを自分のために使ってはいけない、ということです。これと、主によって必要が満たされることは違います。福音の働き人は、その報酬を物質によっても受け取ることが定められています。

けれども、主が行なわれた大いなることに自分自身が触れてはいけないのです。アメリカでは、いいえ、日本を含む他のいろいろな国で、牧師や伝道師が必要以上に大きな家に住んでみたり、必要以上に裕福に暮らしている時に、ゲハジのようになるのだということを思わなければいけません。英語の表現にありますが、God meets our needs, not our wants.と言います。神は私たちの必要を満たすが、私たちの欲を満たすことはない、ということです。